



# シンク・エンジニアリング株式会社

代表取締役社長 岡村勝也氏

## 「命の水と生活の水を守る」使命感に燃える 技術集団

取材・構成 ● 西原勝洋

経済評論家

新型コロナウイルスの感染を防ぐ基本は、手をきれいに洗うこと——と言われているが、これは、きれいな水をいつでもふんだんに使える国ならではの話だ。日本は幸い、きれいな水に恵まれている。とはいえ、取水して貯水した浄水が家庭に届くまでには、さまざまなメカニズムが働いている。シンク・エンジニアリング株式会社は、普通の人が知らない上下水道監視システムの設計・開発・製造・運用に取り組む企業だ。「命の水と生活の水を守る」を基本理念に据えて、使命感がみなぎる会社だ。

代表取締役社長 岡村勝也氏



## 7人の侍の高い志と気迫で創業

水管理の会社なら、その社名の「シンク」とは……SINK（水槽）だとばかり思っていたら、岡村勝也社長は「いえ、THINKです」と答えた。父親の國弘氏（現会長）から社長を引き継いで3年。まだ33歳というのに、落ち着いている。軽はずみな発言もない。

事業承継の前後は、「会長が院政を敷くのだろう」と周囲は見ていたようだ。しかし、國弘氏は会長に退くと、週に1回は本社に顔を出すものの、ひたすら地元経済の振興に汗を流し、経営にはまったく口を出さない。

事業承継までの教育が充分だったこともあろう。そして、何よりも新社長の下での経営が順調であるからだ。

シンク・エンジニアリングの発足は1978年。水管理の計装機器メーカーにいた岡村國弘氏が部下6人とともに独立して創業した。

社内文書にはこうある。

「雷害完全保護システムの水位監視



長野県飯田市の浄水場の委託管理

装置、流量監視装置を主とする工業計器及び、テレメータ・テレコン装置を主とする伝送装置と、監視制御システムの設計・製作・施工・保守を一貫して提供し、公共事業体及び各企業の諸設備を自動化・省力化・監視強化により、運営効率を高め、ひいては我が国の公共事業及び産業界の進展に寄与す

ることを目的とする」

「長年、水道計装システム及びベル制御システムへ携わってきた経験と、蓄積された独自のエレクトロニクス技術すべてを応用し、最新のシステム製作を業として創業する」

水管理に関して、持っているノウハウと技術をフル活用して、公共事業と産業界の進展に寄与するの

だ——高い志と、気迫に満ちた創業の弁だ。

いま起業して小さな成功を取めた若者からは「これは当たるぞと思ってる……：そうしたら当たったよ、本当に当たって大儲けだよ」といった話はいくらでも出てくるが、高い志と、気迫を感じることはほとんどない。

國弘氏が社長を子息に譲ったのは、シンク・エンジニアリングの創業40周年の時だった。40周年記念パーティーが社長交代のお披露目の場でもあった。

それだけではなく、國弘氏と創業以来の苦楽を共にしてきた6人（シンク・エンジニアリングでは「7人の侍」と呼んでいる）も、役員定年で一斉に退いた。

創業以来、会社を引っ張ってきた7人が一挙にいなくなる。大企業だって、社内は大揺れになるだろう。

しかし、シンク・エンジニアリングは何事もなかったかのように、新しい社長と新しい取締役の下、これまでと同じようにルーティンをこなした。

これは、事業体として、すごいことだ。しっかりした組織の下に、練度の高い社員がたくさんいなければ、できないことだ。そういう企業であればこそ、水道事業者（地方自治体）が「あそこは頼りになる」と見るわけだ

## 社員1人が2つの国家資格を持つ

取水口、貯水池で絶対に必要なのは、水位計と流量計だ。それを1セットにまとめた水流計の開発成功が、水道事業者の間で「シンク・エンジニアリング」の知名度を高めた。創業から4年目の1982年のことだった。

パソコンでデータを見て、水門の調整をパソコンでコントロールする。ク



岡山県備前市の水道監視システム



投込式水位計



神奈川県横須賀市の水道管理設備

クラウドを利用してセキュリティを高め、スマホでもコントロールできる。そうしたエレクトロニクスの展開は、創業の時から得意分野だ。「ソフト開発」といえば同じだが、工学部門とはおよそ違う会計分野でも実績を上げてきた。水道料金計算請求システム（1986年）、公営企業法

に基づく財務会計システム（1988年）も開発した。なるほど、SINKではなく、THINKだ。上水道の取水口は山間部だ。水流計も、コントロール機器も精密計器であり、雷が大敵だ。しかし、雷雲の発生を防ぐことはできない。山岳地帯では、

水平落雷が発生する。それで創業の時から製造・販売してきたのが避雷器（アレスタ）だ。避雷針なら誰でも知っているが、避雷器とは何か。避雷針で雷の電流を大地に流しても、落雷にあった建物の中の電子機器類は回線を通じて流れる強力な電流で異常をきたす。近くのトランスに落雷しても、パソコンは回線を通じて流れてくる電流により故障する。

下水道の事業体は全国で950を超える。そこをメンテナンスするだけでも大仕事だ。機動力も重要だが、個々の社員の技術力が不可欠だ。國弘氏が社長に何度も言ったのは「技術人材の育成」だった。現在、社内には1級電気工事施工管理技士29人（うち女性4人）、第一種電気工事士22人、監理技術者（電気工事）26人、浄水施設管理技士9人など、業務に直接関係する国家資格を持つ社員が延べ200人いる。

避雷器は、落雷によって発生する強力な電流を遮断する装置だ。しかし、避雷器の経年劣化や故障は通常、落雷があつて初めて気が付く。家庭用のパソコンならまだ被害は少ないだろうが、上水道の場合は住民の生活に直結する被害になる。メンテナンスが欠かせない。

社員数は110人。総務・経理部門を除けば、社員は平均2つの国家資格を持っていることになる。

壊れにくい避雷器を造り、設置工事として、メンテナンスもする。そして、故障への対応の絶対的な速さ。シンク・エンジニアリングが頼られるわけだ。

全国の水道事業者、とりわけ地方の事業者にとって、大きな悩みの種は、人口の減少が続く中で、水管理部門の職員の高齢化が進んでいることだ。

シンク・エンジニアリングが水管理の計装機器・コントローラ装置、さらにはそれらを複合したシステムを納入している上

地域の人口が減少し高齢化が進んでも、水の需要はなくなるならない。人間は水さえあれば、何も食べなくても1カ月近くは生きていけるそうだが、水の補給がなかったら3日とはもたない。まさに「命の水」なのだ。

**自然災害に遭った時に頼られる誇り**



大分県白杵市の水道監視システム



岩手県釜石市の水道監視システム



テレメータ装置



流量計



静電容量式水位計

水管理のデータはスマホで把握できるとはいえ、水源地や取水地の状況をIoT技術でしっかりと見える化し、流量を調整するのには長年の経験がものをいう。ところが、技術系の地方公務員も、何年かすると転勤がある。そんな状況の中で、長野県飯田市が浄水場管理を、シンク・エンジニアリングに委託した。上伊那広域水道用水企業団も水道管理を全面委託した。

これは、最近話題になった「水道事業の民営化」とは似て非なるものだ。水道事業はあくまで公営だが、その現業部門を民間の水管理のプロに委託するものだ。自治体にとっては、アウトソーシングによる合理化であり、シンク・エンジニアリングにとってはパイロット事業に当たる。

東京・自由が丘の住宅街の一角に、シンク・エンジニアリングの本社がある。全国に7つの支社・営業所、そして開発部門は浜松市にあるから、本社はこじんまりとしている。

社長室も手狭だ。しかも仕切りは天井に届かないパネルだから、ドアを閉しても社長室の話は

社内に筒抜けになる。

「これでもいいのです。うちは秘密がない会社ですから」と岡村社長は言い、さらにこう語った。

「人口減少が続く地方の自治体が納入先ですから、儲かる仕事ではありません。しかし、社員は全員が強い使命感を持っている。特に台風や地震といった災害に見舞われた時に、頼りにされた経験が、社内の士気を高めています」

創業の時の「7人の侍」が抱いた高い志と気迫は、見事に引き継がれている。(にしはらかつひろ)

### シンク・エンジニアリング株式会社

代表取締役社長 岡村勝也

設立 昭和53年

資本金 7000万円

社員数 119名

売上高 18億6000万円

■事業内容 電気設備、計装システムの設計業務、装置・計装装置の自社開発・製造・販売、情報処理・ソフトウェアの自社開発・データ処理装置、工事・電気通信工事、電気計装工事、電気工事 その他

■本社 東京都目黒区自由が丘3-16-15

■電話 03-3724-7201

■http://www.think-tech.co.jp/

きらぼし銀行 自由が丘支店会員